

太郎と次郎

水野 仙子

四

次郎も二三人の子供達と一緒に面白がつてその後あとにつ跟ついて行ゆきました。

子供の歩おそくのが遅おそいものだから次郎もそれで大分時間だいぶんじかんを潰つぶしました。

すると折をりよく其處そこへ空車からぐるまを牽ひいた荷馬車にばしやが通とりかへりました。次郎は之れ幸さいはひと、その後うしろに乗のつかつて得意ごいになつてました。

ところが、荷馬車は次郎が行く方まがでない道みちへぐん／＼曲まがつて行いきました。びつくりした次郎は、慌あわて、其車そのくるまから飛び下くだりましたが、その拍子しやうしに、ざら／＼した土つちに兩手りやうてをついて、厭いやといふほど膝頭ひざがしらをすりむきました。

危あやふく泣なき出しさうになつたと

ころへ、向むかふから一疋ひきの犬いぬが走はつて來きました。するともう次郎の氣きは直すぐ其方そつちへ移うつつて行いつてしまひました。

そして次郎は、犬いぬの側そばに寄よりながら、

「ポチ、來こい／＼。」と言いつて、自分自分の持もつて居ゐた風呂敷ふうよ敷を啣くはへさせ



て、それを離はなすまいと、首くびを振ふつて踏ふん張ばる犬いぬを引ひつ張はりながら駈かけ出でしました。

ところが餘あまりそれで夢中むちゆうになつてゐたものだから、向むかふから勢いきほひよく駈かけて來きた人力車くるまに氣きが付きません。あはやと思おもふ間にバチンと鉢合はちあはせをして、

「あいたツ！」といふ間まもなく、突つ

き飛ばとばされてよろ／＼とするところを、

「え、危あふないツ、氣きを付つけて歩あけ！」と、車夫風情くるまやふせいの者ものからけんつくを喰くはされた上に、次郎は額ひたひの上うへに大きな瘤こぶを一つでかしてしまひました。

さうしてやつとの事ことで粉屋こなやに着きいて粉こなを買かはうとすると、大事だいじのお錢あしが一文もんも風呂敷ふうよ敷の中うちに残のこつて居ゐませんでした。

夢ゆめから覺さめたやうに茫然ぼんやりとしてお家うちへ歸かへつて見みると、馬鹿ばかの太郎たろうは一心しんのお蔭かげでもうとつくの昔むかしに御用ごようをたして歸かへつて居ゐりました。

次郎じろうはさん／＼お母かあさんから小言こごとを頂戴ちやうだいした上に、其日そのひおやつに拵こしらへて頂たまく筈はずであつたお團だん子ごも喰たべられないことになつてしまひました。(をはり)

入力者注…

底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。

底本…讀賣新聞

大正六(1917)年四月十六日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十二月二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)